

2 平成26年度授業研究懇談会－授業の悩みを話し合う

FD委員会は、主に今年度赴任された新任の先生方のご協力を得て授業訪問を実施してきました。これを受けまして、FD委員会は、平成27年2月12日、授業の問題点や工夫等についての意見交換を行うため、授業研究に参加して下さった先生方と授業研究懇談会を開催しました。以下、同懇談会で指摘された課題、工夫について主なトピックをご紹介します。

トピック1：授業の水準はどこに設定すべきか？

学生個々の能力に大きな差があり、どの水準で授業を実施すべきか迷う、という問題を多くの先生から指摘されました。これに関連して、授業の到達点をどう設定すべきかわからない、学部で作成した指針などがあればそれを参考にしたいなどの意見も寄せられました。授業の水準の設定は学生の理解度や単位取得に直接影響を与えます。また、1, 2年次の必修科目を単位取得できないことが退学へとつながる傾向もあることから、大変重要な問題でもあります。

この点に対する対応としては、授業の開始から最初の1か月間は受講生をよく観察し、適切などころで小テストを実施するなどのアイデアが提案されました。小テストの結果が良かった学生には、さらにステップアップするように指導する、また、結果が悪かった学生には、興味や関心の芽をつぶさないように時として「やさしく」対応していくことが大切だとの指摘もありました。それでも授業についてこれない受講生がいた場合には、ティーチング・アシスタントをお願いすることや、補修クラスを設けるなどの案も出されました。



懇談会の風景1

トピック2：学生の受講態度をよくするためには？

教室の後方に学生が座るため、指定席にするべきか迷っているという意見が出されました。これについては、小さい教室に変更することや、携帯電話を授業中に操作している学生の場合には、当該学生の名前を挙げて注意する等の対応方法が参加者の間から出されました。これら以外にも、毎回座席を指定する方法（毎回変える）や、ペアワークに参加させるなどの方法、また、途中退室者には出席の取り方の工夫で対処するなどの意見も出されました。

トピック3：今後の授業研究の在り方とは？

まず、他大学で教鞭を執られた先生方より、他大学では授業研究の実施方法などについて、希望を重視し、幅広く行われていること等が紹介されました。また、学生アンケートなどで授業評価が悪い先生は授業研究を義務化されている事例なども紹介されました。ただ、授業研究の義務化については複数の反対意見も寄せられました。その主な理由は、本学部の性格上、授業内容が多分野にわたってお

り、他分野の教員が他の教員の授業内容を評価できないというものでした。これらを踏まえて、新任教員やニーズのある教員（授業見学を引き受けてくれる教員）に実施してもらうとの意見が出されました。授業研究を受け入れてもらう工夫としては、授業評価のよい先生にはそれを伝えて、それを根拠として授業研究を引き受けてもらうのがよいとの意見が出されました。



懇談会の風景2

トピック4：有効な授業アンケートにするためには？

真面目に回答している学生と、そうではない学生がおり、結果は差し引いて考慮すべきであるとの複数の意見が出されました。また、学生の立場からすれば、授業アンケートの価値や意義があまり伝わっていないこと、特に、教員がアンケート結果をどう工夫して授業に活かしているのかについて学生にはわかっていないことなどが課題として指摘されました。他大学の事例として、授業評価の悪い先生は授業改善計画書を提出していたことなども紹介されました。これについて、アンケート結果は、学生の取組み方や判断力にも差があるため、トータルな授業評価とは成り得ないとの反対意見も出されました。それ以外では、コメント欄は判断材料として参考になるとの意見が複数出されたほか、留学生も回答できるように英語版を用意すべきであるとの意見もありました。（文責：大西富士夫）

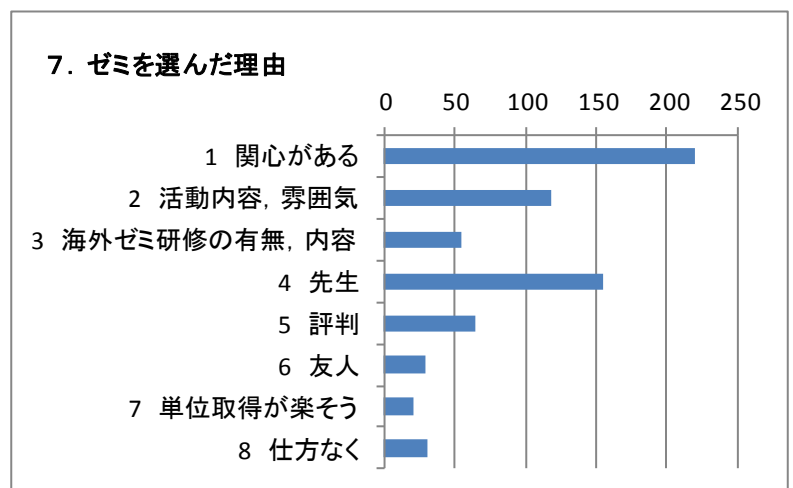
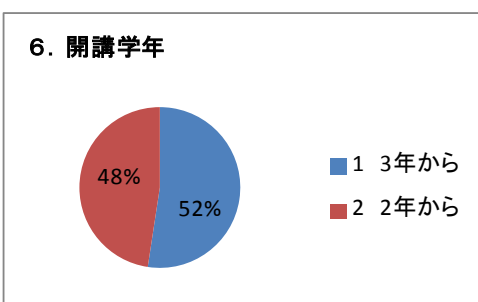
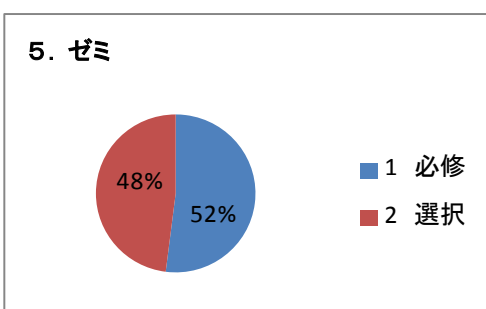
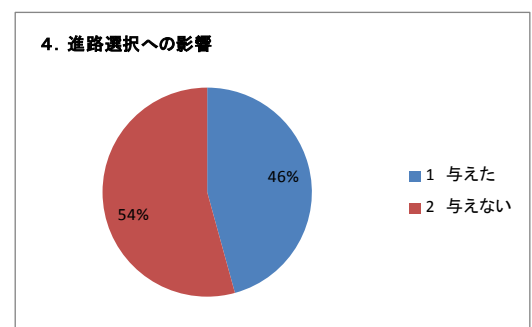
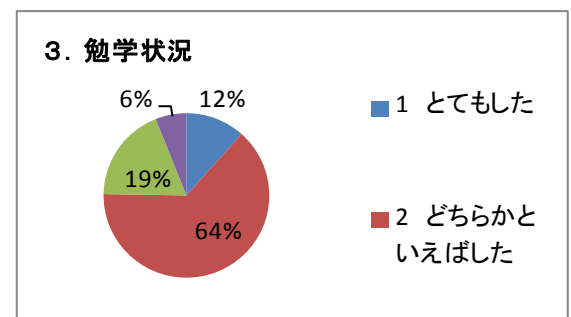
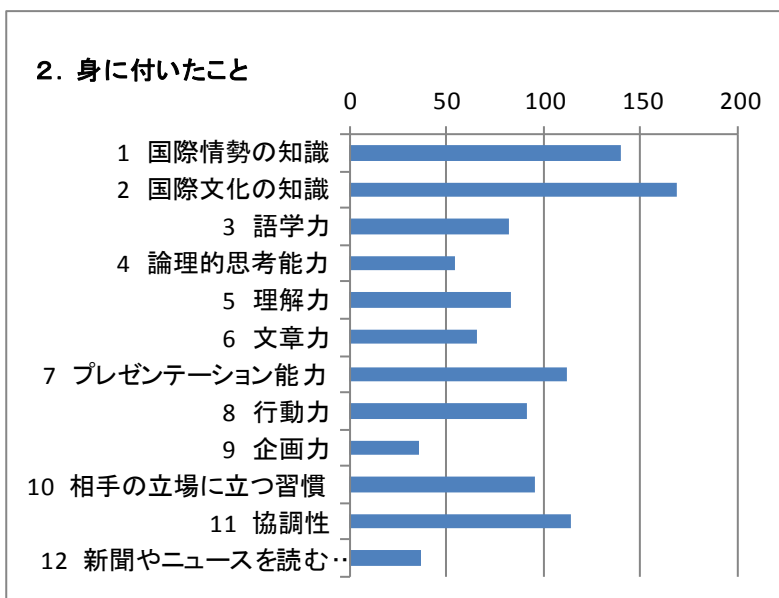
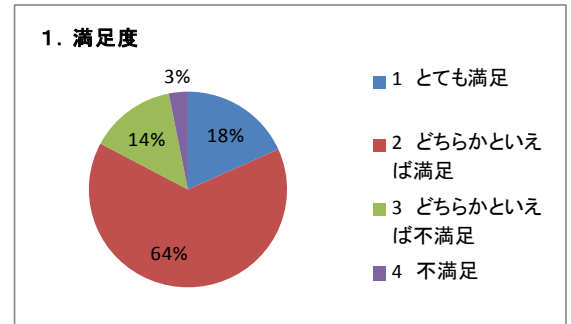
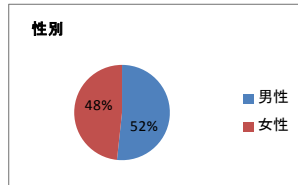
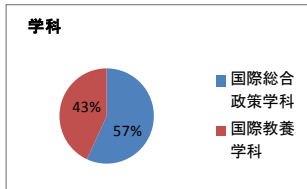
ご参加くださった先生方、ありがとうございました。この懇談の内容を踏まえ、今後引き続き「授業研究」の在り方をFD委員会で検討して参ります。



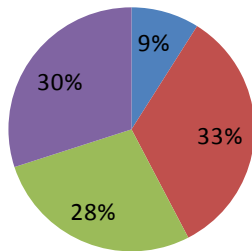
参加者（敬称略）：石田勝之、大川英明、松浦康代、梅本順子、小川直人、八塚春名、キンセラ、FD委員

3 日本大学国際関係学部改善のためのアンケート集計結果

(有効回答枚数:385枚)

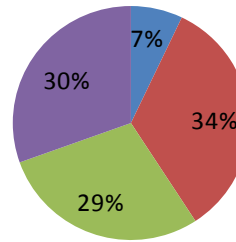


8. スタディ・スキルズ



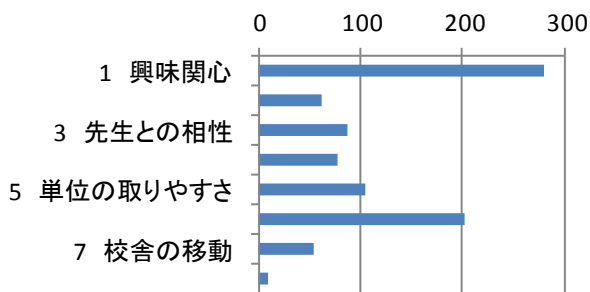
- 1 とても役立つ
- 2 どちらかといえば役立つ
- 3 どちらかといえば役立つたない
- 4 役立つたない

9. キャリアデザイン

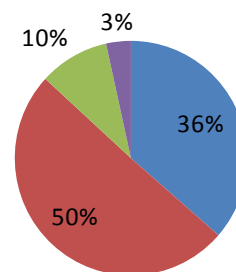


- 1 とても役立つ
- 2 どちらかといえば役立つ
- 3 どちらかといえば役立つたない
- 4 役立つたない

10. 授業選択で重視

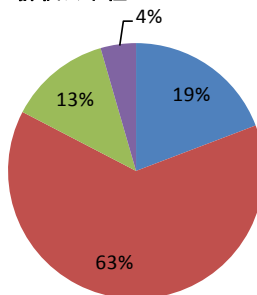


11. 週2回授業



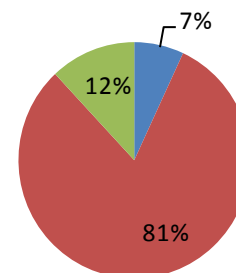
- 1 効果的
- 2 どちらかといえば効果的
- 3 どちらかといえば効果なし
- 4 効果なし

12. 評価公平性



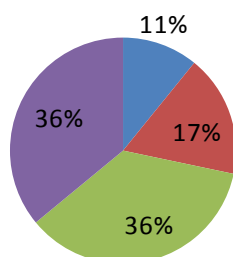
- 1 とても公平
- 2 どちらかといえば公平
- 3 どちらかといえば不公平
- 4 不公平

13. 外国語科目



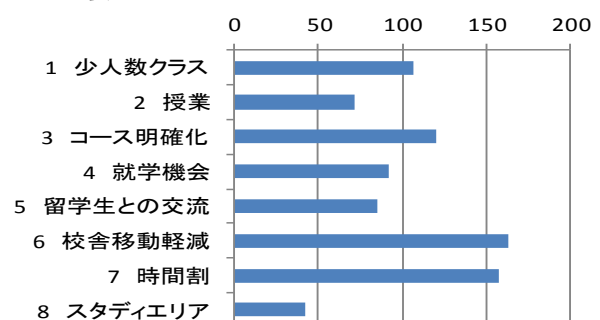
- 1 多すぎる
- 2 ちょうどよい
- 3 少なすぎる

14. 海外渡航日数



- 1 93日以上
- 2 32-92日
- 3 1-31日
- 4 0日

15. 要望



4 日本大学国際関係学部・新学科1期生の声

— 国際の“学び”をどう感じたのか —

本年度は国際総合政策学科・国際教養学科の2学科体制の完成年度です。これを機に、国際関係学部の教育をよりよくすることを目的として、新学科で初めて卒業するみなさんにアンケートを実施致しました。回答数は国際総合政策学科(以下、政策学科と略記)が207(53.9%)、国際教養学科(以下、教養学科と略記)が157(40.9%)でした。満足度は、「とても満足している」または「どちらかといえば満足」と答えた学生は政策が84.1%、教養が81.6%となりました。両学科ともに8割以上の学生が満足していると回答していることはプラス評価できます。

個別の項目の中で主だったものをみていくと、以下のような傾向が見られます。まず、ゼミについてですが、必修にしたほうが良いか、それとも選択がよいかという項目では、必修を選択した学生は両学科平均で50.8%(政策学科が50.7%、教養学科が48.4%)でした。FD委員会の検討会では、これらの数値を高いとみるべきか、低いとみるべきかについて意見が分かれていましたが、選択制を選んだ主な理由は、「やる気がない学生がいるとゼミの雰囲気が悪くなり、活動がやりにくい」というものであったことから、ゼミの在り方については、開講年度も含めて検討が必要です。関連して、ゼミの選択理由の項目では、両学科共に「関心があるから」が過半数以上にのぼりました。次に多かった選択理由は「先生」という項目で、両学科平均は40.4%に達しました(総合学科44.4%、教養学科37.6%)。学生によるゼミ選択は、個人的な関心に加え、先生という要素も選択の際の大きな要因となっている実態が明らかとなりました。

スタディ・スキルズが役立った(「とても役立った」ないしは「どちらかといえば役立った」と答えた学生は両学科平均で42%となりました(政策学科が39.2%、教養学科が45.2%)。キャリアデザインを役立った(同上)と答えた学生は40.1%でした(政策学科が39.6%、教養学科が40.8%)。両科目とも過半数の学生が現状に満足していない状況が明らかとなり、早急に改善が必要です。

海外渡航日数では、0日と答えた学生は、35.4%となりました(政策学科が28.2%、教養学科が32.5%)。この数値の評価についても、FD委員会の検討会では、6割強の学生が海外渡航をしておりよい結果だとする見解と、海外渡航者数が少ないとみる見方に分かれてきました。この項目は、家族の経済状況、世界治安状況の悪化も大きく影響するため、その結果の是非については慎重な検討が必要ですが、さらなる留学制度やそれを支える奨学金制度の確立なども視野に入れるべきではないでしょうか。

大学への要望に関して、最も多かったのは、校舎移動の軽減でした。両学科を合わせた平均は42.7%となりました(政策学科が42%、教養学科が44.6%)。カリキュラム編成との関連もありますが、学生の強い要望として今後検討が必要な課題だと思われます。

(文責:FD委員会)

5 日本大学短期大学部(三島)卒業生アンケート集計結果

・ビジネス教養学科

2月に開催された進級・卒業ガイダンスにおいて、卒業生を対象に本学科の満足度調査のアンケートを実施した。卒業生に対するアンケートは初めての試みである。

特筆すべき事項としては、本学科での指導内容が、進路に影響を与えたかという質問項目に対し、83%の学生が「与えた」「ある程度与えた」と思っている点である。本学は、編入希望の学生が半数を超えるために、入学当初から編入したい学部を決めている学生が多い。それにも拘らず、影響を感じているという事は、本学独自のガイダンスや各担当教員の授業内容等に効果があると評価できる。

一方、要望に関しては時間割に対する項目が一番多く、改善を検討する必要がある。いずれにしても、このアンケートを恒例とし時系列で分析することが必要である。

(文責:雨宮史卓)

・食物栄養学科

食物栄養学科では、従前より大学満足度・意識アンケートと題して卒業ガイダンス時に独自にアンケートを実施しており、回収率は短大2年生・専攻科共にほぼ100%です。

授業関係の満足度は「とても満足」と「満足」を合わせて、教え方についてなどは80%と高い評価を得ている一方、選択の自由度については74%と少し低値を示していました。これは栄養士という資格に縛られた学科であるためやむを得ない面があるように思えます。今後の課題としては、教室設備の評価が、50%になっていた点などが挙げられます。

(文責:太田尚子)

6 H26年度前期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部授業アンケート科目別結果

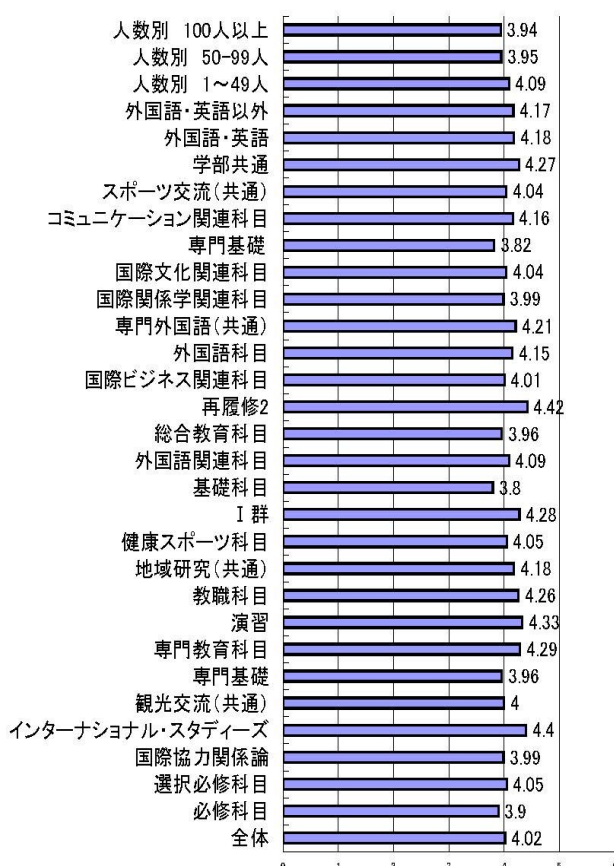


表2 短期大学部授業アンケート科目別結果

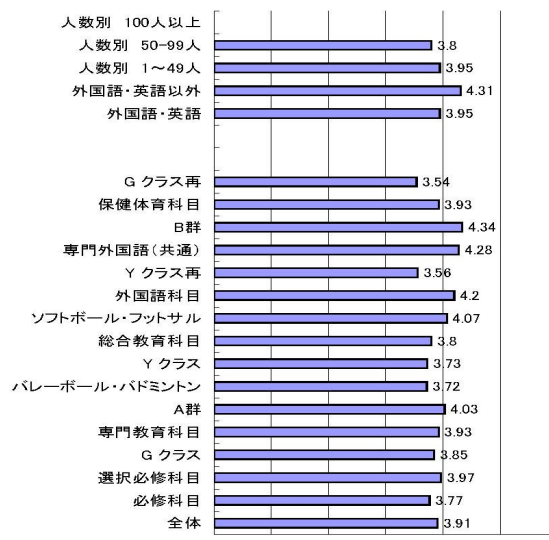
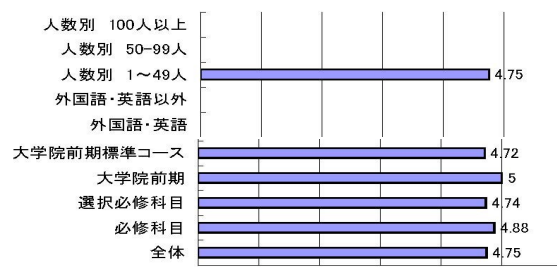


表3 大学院授業アンケート科目別結果



アンケート結果をお届けするのが大変遅くなり、後期授業に活用していただくことが殆どできなかったことをお詫び致します。今後は出来るだけ早くお知らせできるように努めますので、今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成26年度前期の授業アンケートは表1・表2にある通りの結果となりました。各授業担当者が授業評価の詳細を参照し、授業改善に役立てていただければと思います。国際関係学部授業評価アンケートのH26年度の全体の平均(前期)が4.02でした。経年変化をみると、H22年度前期が4.2、後期が4.3、H23年度の前期が4.17、後期が4.22、H24年度の前期が4.22、後期が4.3、H25年度前期が4.24、後期が4.32と変化しています。後期の方が平均点が上がる傾向がみられますが、全体の推移としては、ほぼ横ばいといって良いでしょう。

短期大学部の平成26年度授業アンケートの全体平均は、前期3.91でした。経年変化をみると、H22年度の前期が4.0、後期が4.1、H23年度の前期が4.0、後期が4.16、H24年度の前期が4.14、後期が4.24、H25年度の前期が4.24、後期が4.2と変化しています。短期大学部も後期の方が平均点が上がる傾向がみられますが、今回の全体平均は、過去の全体平均よりも下回っています。大学院は受講者数も少なく、授業形式も異なるにも関わらず、項目が学部生と同じで無理があります。前回アンケート実施時と同じ反省点となりますが、早急に大学院用のアンケートを検討するのを感じます。

個々の結果を見ると、大人数授業と、専門基礎科目、必修科目などで評価が低い傾向があります。この傾向は変わっていないために、こうした科目への支援と対策が必要です。また、平成24年度の後期から試験的にアンケート入力Web化に取り組んでいますが、アンケートの回収率の観点から、紙でのアンケート回収も継続することになりました。担当教員は学生が回答しやすい形式を選んでいただき、結果を回収してください。

最後に、日本大学の本部でも一層、FD活動に力を入れております。その一環として、授業アンケートの項目の中に共通の質問事項を入れることになりました。昨年度の項目と異なる点があるので、ご注意ください。本号でも取り上げましたが、日本大学においても教員だけでなく学生FD活動も、はじまっています。教員と職員と学生が一体となって、より豊かな大学教育が実現できればと願っております。(文責:FD委員会)

日本大学国際関係学部 FDニュース 第8号
 発行者 日本大学国際関係学部
 FD委員会委員長 安元隆子
 FDニュース小委員会 大西富士夫・長峰宏作
 発行日 2015年3月19日